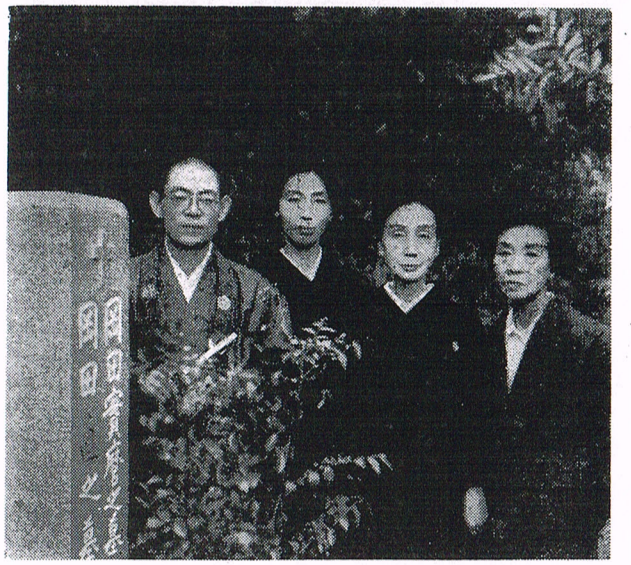
「みどり」昭和33(1958)年10月号

手記

私は「蒲団」のモデルだった

永代美知代



（最近の筆者　―右端―）

本誌七月号の名作モデル物語、「田山花袋『蒲団』の横山芳子」に対し、当のモデル永代美知代さんから真相を語る次のような手記が寄せられました。小説「蒲団」に基づいて執筆された田中純氏には、御迷惑の点もあるかと思いますが、公平な立場からあえて発表いたしました。

（編集部）

「みどり」1958.10

（国会図書館）

別府の宿で

『どう致しましょう奥様、私さんざん遊ばれちゃいました』

泣きそうになって、取次ぎの小女が二階に上って来ました。

『お玄関で奥様いらっしゃいますかと、おっしゃいますから、いきなり、いらっしゃるともいらっしゃらないとも申上げられませんもの、何時もの通り、誰方様でと伺いますと「人間の田中ですが奥様は？」って御返事でございます。で、どなた様でと白っぱくれますと「人間の田中ですが奥様は？」と先様も矢張り、幾度でも「人間の田中だ」とばかりお繰り返えしになりますの――人間に定ってます。それ位解ってます。とつい私、かっとしちまいました』

『人間の田中さんなら解ってるのよ、早く此方へおあげして頂戴、早くね』

別府でお別れして以来、御上京の事、雑誌『人間』に御入社の事、承ってましたけれど、お訪ね頂くことちっとも存じませんでした。自然お玄関でヘマなお取次ぎ致しまして、失礼さま。でも別府の宿で、初対面のあの節はほんの好奇心でもって、『モデル見物』にいらっしったそうですから、五分五分、否、五分五分処か、あなたの方がうんとおつりをとってらっしゃいます。併しそれも仕方がない。あの頃あなたはまだお若いヤソ教の伝道師、見習いの格で、神戸関西学院神学部を御卒業前の、夏期伝道かたがた、御入湯と承りましたもの。あの時御一緒の熊本高等学校の秀才――矢張りお胸の病で御死去とか、惜しいこと――あの方と知合になったのは、別府で一番最初に泊った、竹河原の宿でした。浜脇に移った二度目の宿で、私達はあなた方お二人に訪問されました。私があなたをお懐かしく感じたそれは、同志社と関西学院と、学校こそ違え、曾ての永代と同様、神学部に籍を置いた牧師志望でいらっしったからでした。その上神戸女学院の先輩、森本お縫さんの兄君、鉄石氏夫人が、あなたの姉さんであるという。それも何かの因縁のように思われました。而もその森本さん御兄妹は松村介石先生の実のお児達ですし、松村介石先生その人は日本硬質陶器の瀬戸徳兵衛氏を通じて、私の父とも知り合いの仲、十国峠のあの広大な瀬戸家の別荘の中の不老庵で、よくお眼にかかった思い出もあり、初めてとは思われぬような親しみすら、感じないではいられませんでした。

ただしあなたの方では飽くまで『モデル見物』の、目的にすぎなかった。

「『ヤァ、モデル見物に来ましたね』如才なく迎えてくれたのは、永代静雄――『蒲団』で田中秀夫となっている青年である。」

と書いてらっしゃる。「如才なく迎えた永代の傍で、二つばかりの男児に乳を吸わしている女人が、岡田美知代――『蒲団』で、横山芳子として描かれている人の、数年後の姿であった。確かに美知代という人はあの頃では、全く新らしいタイプに属する女であった。花袋はその小説の中で、彼女の事を『美しい顔というよりは、表情のある顔、非常に美しい時もあれば、何だか醜い時もあった。眼に光があって、それがよく働らいた』と描いているが、この描写は的確である。私もその夏つぶさに彼女を観察したものであるが、彼女の顔がその時の気分によって、まるで別人のように変るのに気がついていた。その事は彼女の感受性が非常に鋭い事を示す反面に、その知性がまだ幼い事を示すものであろう――」

成る程、私はあの時あなたから、余程知性の幼い女として観察されたものらしい。何故と云って普通赤ん坊も八ヵ月ともなれば、とっくに離乳の時機にもなっているものを、二

つ位にもなった男児を抱いて、事もあろうに、初対面の若い男のお客の前で、おくめんもなく胸を拡げ、必要もない乳を吸わせる女。何たる教養のなさ。馬鹿でなくて何でしょうか。何が新らしいタイプの女ぞ！　旧式な、碌すっぽ女学校の門一つくぐった事もないものだって、そうした不作法な、無茶苦茶な真似はしますまい。『まだ知性が幼い』というよりも『この女、大分知性が欠けている』と何故はっきりおっしゃらない？

とはいえ男性の事ではあり、殊にはまだお若いみそらで、幾らつぶさに観察されたとて、そこはそれ、観察されたおつもりに過ぎなかったのでは、なかったでしょうか。あなたが二つ位と御覧になったあの児は、永代が富山日報編輯局長として、越中富山赴任中に産れ、大阪のA新聞に二ヵ月足らず勤めた後、一まず新聞記者の足を洗わせ、元来作家を志望の其方に進ませたい私の希望から、暫く休養を兼ねた入湯につれて来た、ほんのまだ五月にもならぬ乳児でした。自然折角御来訪のあなたの前で、どうにもならぬ必要上、失礼したと存じます。

その私達の別府入湯もあなたの御観察によると「その頃彼等は、あの小説のモデルで余りにも騒がれた事にもたたられ、東京にいられず、夫婦で童話など書きながら九州を放浪していたのだ」とありますが、私達の都落ちは富山日報に赴任の為めで、東京にいられず九州放浪はあなたの間違い、幾ら物価の安かったあの時分だって、赤ん坊をつれた夫婦が童話位を書いていたのでは、とても温泉宿になんぞ泊ってはいられません。それに私が抱いて乳を吸わせていた問題のその児が、当歳の乳児で、決してあなたのお説の二歳位の男児でなかった証拠は、ちゃんと今でも友人森田恒友画伯の手によって、スケッチされた『母ちゃんにだっこ』の姿が残っています。段々宿屋暮しに倦きて来た私達は、御承知のあの浜脇の宿の近くに、小さな別荘建ての一戸を借りて住みました。湯の量の多い事世界一の別府ですもの、気持ちのよい浴室の他、台所にまで湯壺があって、煮えたぎったお湯がこんこんと、湧き出ていました。丁度フランスから帰ったばかりの恒友画伯に入湯をすすめ、私達の処にお招きしたのです。

御安心下さい。私達は童話の他に東京のK書肆と特約の、「世界女王伝」から月々送られた定収入がありました。永代が女王キャザリンを、私はイサベラ女王をと云った具合に、ひまを見て『念珠』の翻訳にかかる余裕もありました。

私たちは悩んだ

次に「多くのモデルがそうであるように、彼等も亦烈しい怒りを持って、或る夜美和代は涙を流して、その不当を訴えていた」とのお言葉。おっしゃる通り永代が必要以上に、軽薄な厭味な青年として描かれている、其処が一番私の気に入りません。とても不平で堪りませんもの。併し自分自身がどんなに曲筆されても、私達二人はうそっこだと知っています。先生は先生御自身で御存じの事。万事絵空事位にしか考えていませんでしたから、別段憤慨もしません。どころか『蒲団』を読んだ直後の私は、お言葉の『まだ幼い知性』のせいか、或は重いチブスの病後のせいか、エス様以上の先生が、心密かに怪しい情火を燃していられる等、思いもしませんし、私が先生を誘惑するような態度を示したとは、有り得よう筈もない。恩師と愛弟子、其処には歴とした垣根もありますし、第一月とすっぽんてんで話にもなりません。私はそれほど身の程知らずでもない、私には私相応な恋人を得ているではありませんか。但しあなたにお逢いしたのは、私二度目の上京後、永代と恋敵同様の先生御膝下にいる事は、非常識極るもの、友人達から教えられ、その点いかにもと気づいて、すでに私達同棲後ですから、或は泣いて訴えたでしょう。でも神と尊ぶ私の前の先生は、決して批難されるべき先生ではなかった。ですから私は、当時の青年雑誌に寄稿して、先生の御人格を極力証明したものでした。繰り返して申します。あの頃の私は作家の甚しい曲筆に駭いた。それはただ恋人たる永代静雄に関する不当な描写だけで、先生の心の裏深く秘められた、浅間しく悲しい嫉妬など、さしもに鋭い感受性の持主私も、温情なる恋の保護者たらん御誓いの先生を、一途に信じて夢疑う事もなく御実行の日を待ちました。『蒲団』の件につき「九月になって上京した時、その旅程が曖昧なので、訊きただして見ると、上京の途中の二日ばかりを、恋人と一緒に須磨や嵯峨で過した事が解った」――須磨とは何ですか。郷里を発って神戸の兄の宅に一泊、旅程の違いは二日に非らず、一日です。その間一緒にいた永代はまだ、単なる友人でした。但し琵琶湖畔の駅で別れた直前、口にこそ語らね、確かに恋を自覚したその告白も了解されました。私はその後西須磨の辰馬別邸で、西灘のC家長男と見合いを兼ねた避暑で、珍らしくもない須磨。神戸発東京の汽車を、須磨では方角違い、嵯峨の月も見ていません。

あなたもヤソ教の牧師を志望の方でした。今少し気を入れてお調べになったら、あの年の講習会が、基督教夏期大学の名の下に、須磨ではなくて、あなたの母校、関西学院の真上の、摩耶山で開催された位、すぐにも解ったでしょう。同じ教会の会員で、顔は見知っていましたが、正式に友人となったのはこの夏期大学で、如何にも恋のきっかけになったか知らないが、お互にまだ自覚はなかった。若い男女が恋をして、急転直下実際問題に堕し得るかどうか、少くとも私達明治っ児には出来ません。良家に育って当時最高の教育を受け、自ら以て新らしき女の尖端を切ろう事を任ずる者、神を信ずる私達二人の上をどう御覧になるか。『蒲団』によって、この荒筋を書いて見よう」と、断ってあるから仕方がないが、「その内に永代が美知代を追って上京して来た。一度は花袋に戒められて京都に帰って行ったが、間もなく又上京して来て密かに美知代と逢引きを重ねる」――とは何ですか。『蒲団』によって荒筋を書くなら書くで、何故芳子が、秀夫がとお書きにならなかった？ヤレ美知代が、ヤレ永代がと、まるで私達二人が左様に行動したかの如く記された。まことに迷惑千万。知らないものは本当かと思い

美知代さんの若き日のおもかげ

やはり美知代さんをモデルにした花袋の「縁」の女主人公敏子。和田英作氏の筆になるこの口絵、若い日の美知代さんをほうふつとうかびあがらせる。

ます。生憎ながら永代は決して、美知代を追って出て来ませんでした。芳子の秀夫のように、二度上京しませんでした。秀夫のようにこそこそ来たりしないで、まず先生お宅の美知代に電報を打ち、公然真すぐに先生の玄関に着きました。先生と初の会見も秀夫の如く変てこりんな調子でなく、立派でした。ハイ、立派でしたと、私は敢てはばかりません。永代は上京以前、先生から同情のお手紙を頂き大いに感激しました。勿論それだけが上京の動機の全部ではないが、少くとも動機の最大な因ともなった。それはいなみ得ないと思います。自然先生としてもむげにあの際、京都に追い返すわけにも行かなかったし、温情なる恋の保護者たらん事を私達二人に、一旦誓われた言葉もあり、私を訪ねて先生お宅に来る彼を、来るなと命じる程、先生を怒らす馬鹿な彼でもなかった。ですけれ共やがて、恋の並木に行き暮れた私達二人が、兼て一番怖れていた感激の一歩手前に立ち到った時、折柄上武の境に御出張の先生あてに、私は思い切った嘆願の手紙を書きました。それは惑溺か同棲か今や岐路に佇む私達、先生の御了解を得たく、御教示の程お待ち致します。と誠に大胆な嘆願でした。先生はあわてて郷里の父を招び、大変な騒ぎになりました。斯くも大胆極る嘆願に及ぶ以上、或は已に一歩を進めた二人でないかと、例によって例の如く、先生の心痛は極端にまで達しました。そしてあなたはお書きになった。「父親の上京中、美知代が已に処女でない事が、はっきりとなる。花袋も父親も駭然とする」。『蒲団』にだってそんな風には書かれてなかった筈。あなたは何が故に斯様な断定をお下しなさり得たか。『蒲団』では芳子の最後の告白がある。併しそれは芳子の告白でした。美知代の最後の告白なるものは、あくまで永代の退京をせまり、強って美知代をその膝下に置こうとする、先生御庇護の慈愛に背き、恋人永代に代って、美知代自身が退京する、未来の良人たる者のために悲壮な覚悟を定めて、山に帰りたい嘆願的告白でした。

崩れ落ちた花袋の面影

そうでなくても自然主義の大家田山花袋の作であり、その偽らざる告白と銘打たれている以上、読者の大半が、書かれた筋をありのままに受取りたがるのも当然。恩師花袋先生の代表作である、その一点に敬意を表すればこそ、五十年の久しきそれに依って蒙った、世間の誤解をさえ敢て解こうとしなかった私でしたけれども、今や漸く自然主義研究者の間に『蒲団』に於ける虚実なるものが、云々されている折柄、私の考え方も大いに変って来ました。実際私は『蒲団』以後の先生のお作を、まるきり読んでいませんでした。先生お作に対して、永代は時々何処かの雑誌に頼まれて、感想を発表したりした話も聞いていましたし、後々発見した事ですが、私に何のことわりもなく、永代はそれに私の名前を用いていたようでした。而も先生お作は私達家庭の平和のために、絶対に読むなと永代から禁じられ、自然今日まで私達夫妻にとって、切っても切ってもたち切られぬ関係のお作『幼きもの』のある事さえ、知らなかった程でした。

でも今年の正月以来、すすめられて先生の全集を読むに及んで、恩師に対する思い出の、その御面影に揺ぎを来し、とても煩悶し初めました。そして恩は恩、怨みは怨みと云った観念にまで進みました。自然エス様同様の高みくらに崇め奉った、先生の御面影は私のこの胸から、終に悲しく崩れ落ちました。そして私は『蒲団』の虚実を、じっと静かに見詰めて、ああではなかった、こうであったと、あなたから云われた『まだ幼い知性』の程を、しみじみ思い当っているのです。

今年の三月、私は遂に『花袋が』なる言葉を私自身の口から聞いて　われながら駭然たらざるを得ませんでした。私はかりそめにも、恩師の事を何等の敬語なく口にした覚えはなかった。『先生』が普通で、人様と談話のさなか独歩、藤村等々そうした諸先生と特に区別して表現しなければならぬ場合、『うちの先生』なる言葉を用いるのが常でした。そのように先生は、いとも尊くかしこきわが仏なのでした。そのわが仏の面影が崩れて、自然と口にした『花袋』、而も人前で怪しくもほとばしり出たその心境！

ですから今度あなたの『みどり』誌上の御手記を拝見して、どんなにごうを煮じたことか。とてもやり切れない思いでした。

あなたはまだ私達離婚の原因や、永代の仕事の上や、まるで講釈師見て来たような式で、年代も何も無視した事がらばかりお書きでしたが、私達の家庭は私達一生の一大事業たる、恋愛の歴史からいっても、単なる花街における遊興の嫉妬位で、左様にたやすくいとも簡単に、破壊されるべきでなかった、とお思いになりませんか。あなたの恋愛が、あなたの御結婚が、どんなものかどんな具合になり立ったやら、一向知る間もないこの私に、あなたのアフェヤァが如何なのか、判断出来ないのと同様、ああか斯様かと好い加減に想像を逞しうなすった上の、事がらをお書きになる他、仕方もありますまいが、しかし、かりそめにも文芸評論家であるあなたに、そう無責任にやられた日には、当方が困ります。あなたは亦作家でもいらっしゃる。だからと云っておくめんもなく、批評上想像的創作的筆をお執りになってはやりきれない。文芸の批評家なら批評家らしく、何故今少し慎重な態度でもって、作品の上に現われた、むじゅんによって来る処の虚実の真相を見据え、見きわめようとはなさらない？　事実をあるがままに書くべきだと、主張された自然派の作品だからとて、あながち皆が皆、その主義主張に忠実であり得た作品ばかりと、云えなかった例が、全然ないわけでもありますまい。ともすれば作者の主観が出たがる上に、兎角曇りたがり歪みたがる。一度その歪んだ主観を現わしたため、その作そのものの構想をさえ、あらぬ方向に引きずられ、遂にはしなくもフィクション風のものになり切って了わねばならぬ——と云った事にもなり兼ねない。誠に以ておこがましい云い分ですけれど、現にあなただって云ってらっしゃる——

「確かにあの小説は作者の主観を描く事に重点を置いているので、事件の全体を花袋風に見過ぎている点があり、相手とする若い男女の心理や行動に理解の足りない点も眼立つ」そこで私は云います。人間それぞれその生い立ちを異にし、環境の相違による其処には、到底理解し得ぬものがなくてはならぬ。自分の口から申すのも変ですが、所謂深窓に育ち、久しくミッションスクールに学んだ私。幼い頃から小僧っ児奉公の先生。独業で築き上げ、殆んど学生生活を御存じない先生。どうして私の恋愛が解りましょう。若い男女の単なる交際、それが第一解らない。欧米の名作をどんどん読んで若い男女の交際を知り、更に恋愛の場面を見尽したとて、その全部尽くが、決して御自分の体験ではなかった。自然どうして本当の事が解ろう筈がない。私の口からつい『私達』なる言葉が出て来ると、何たる事ぞ、まだ許婚の披露もせぬ癖にと早速気にして、不快で堪らない、或は又、あんな夕暗の小路を並んで歩いて、二人は屹度手を握ったろうと思って見たり、もっと際どく甚しい想像を逞うして、惑溺はほんの刹那の問題だと、変にやきもきしたり等、そうした中年男の心理状態を、若い者はまた反対に呑み込む術もない。無茶苦茶な悪酔を見て、私が堪らなく気を揉むと、先生は事もなくおっしゃって、それでもチャンとおやめになった。

『娘を嫁にやりたがった癖に、いざお嫁にやったとなると、堪らなく淋しくなる父親の哀愁と同じさ』

幾ら気に入っていたとしても、進んで結婚する気もない――と現に先生御自身あのお作の中に書かれた通り、突然恋人として現われた一介の書生風情に、奪われるのが嫌さの、ほんの一寸とした嫉妬。それに作者の大袈裟な主観の重点を置いて構想されたものですから、その表題が『恋と恋』とされようと『蒲団』であろうと、最後の場面に進められる迄には、種々とあらぬ空想が、その主観に加重されて来る。と又その対象として然るべきもうそう的、筋書きを用意しなければならぬと云ったようなことにもなる訳合いのものではなかったか。ともあれ、『縁』ともなれば先生の所謂「感情に感情が加わり」自然と色々むずかしくもなりますけれど、少くとも『蒲団』までの先生は、芳子の恩師竹中時雄のような人物では毛頭なかった。して又一方芳子にしても、その生い立ちから教養から、私はどうしてもあの芳子の最後の告白が、腑に落ちない。受取れません。

とにかく先生から教わる自然主義の行き方にしても、私は私なりの主張がありました。『君は遂に理想派の域を脱し得ない。尼さん教育が腹の底まで染み込んでる！』

かも知れない。併し神の子でもない悪魔の子でもない人間が人間である以上、水が低きにつく如く、理想からぬけられぬそれが、人間自然の姿ではなかろうか。私はそう思う。

七十路の君がゑまひはさにづらふ少女の如しその声もまた――最近誰かから贈られたもので、今後理想から脱し得ない其処に、私の幼さがあるのかも知れない。

死ぬ迄続くであろうこの小恥いは、あの初恋の当初からついて廻った性癖で、蓋し私の恋愛のやりかたなど、誰にだって解って貰えず、先生から曲筆されたって仕方がない。

「私の顔がまるで七面鳥のように変って、その時々の気分で如何にでもなる。」――それは自分でもって知ってます。だからと云って「感受性の非常に鋭い彼女が、太平洋戦争の勃発を察知し得ない筈はなかったけれど、生憎とその反面、その知性がまだ幼いために――つまり少々小馬鹿なために、何時迄も愚図ついていて、交換船で送還されちゃった！」とおっしゃりたかったのかしら？　お気の毒乍ら、あなたの文章では、感受性が非常に鋭いその方が、前に書かれているせいで、その後にかかれた『知性の幼い』方まで待ち切れませんの。彼女は交換船で送還される迄、まごまごしていませんでした。戦争の始ったのは年の暮の十二月八日でしたが、それよりもずっと以前、世間の人達がのんびり構えて初春を寿祝っているさなか、早くも帰国の船に乗り込んで、さっさと自費でもって、ひきあげました。

送還船で帰れば旅費が儲かる上に、欧州廻りで方々港々の見物も出来ると云った、考えかたもあるか知れない。しかし持って生れた性分で、損得など考えたくもなし、第一このプライドが許しません。

「もう七十過ぎている筈だから、あのよく働く眼も、昔のみずみずしさを失っているのではないかと思われる」

当り前じゃありませんか、昔から余りみずみずしくもなかった私の眼です。みずみずしさとおっしゃるそれは、散々悪口した代りのお世辞でしょうが、少々しょぼついた嫌いがないでもないものの、両眼とも揃って見えて、どうかした時、年齢だナと思うこともありますけれど、お蔭さまでまだ、めっかちにもなっていません。

あれから大正、昭和とかなり随分月日が流れて、お互に自分で驚ろくような年齢になりました。気ばかり強くても年齢には叶いません。どうぞ御健康にお気をつけになって恙のないように祈ります。